

「地域連携&課題解決」 ～中高生と大学生との学習支援ボランティアをととして～

算数科教育研究室 河野 康男

算数教育／算数科カリキュラム

1 解決すべき課題（背景・目的）

現在、学校現場、特に小学校の教職員については大量採用時代を迎え、採用倍率の低下もあり教職員としての質の低下が危惧される状況にある。このような状況の中で、大学の教員養成課程においては、採用倍率にとらわれず、教育現場で力を発揮し得る現場力を備えた人材を育成していくことは、教育の質を担保するうえでも重要なことだといえる。

本学では学部創設以来、単に教育や保育の専門家になるだけでなく、地域共同体の再生の核として活躍できる学生の育成に取り組んでおり、学校現場と大学との往還的な学びの中で、子どもを知り、教育の現場を実践的に理解するための体験的な学びを大切にしている。

中でも学習支援等のボランティア活動は教育実習とは違った側面から学生の気付きを促し、職業観の育成や大学で学ぶ理論と実践との融合を図るうえでも貴重な体験の機会となっている。

そこで、今回の報告では串間市生涯学習課の主催事業である「夏休みチャレンジ講座」（小学生の夏休みの宿題での学習支援）への本学学生の学習支援ボランティアでの参加を通して、「地域連携&課題解決」に係る取組について報告を行う。

2 地域連携&課題解決の内容

令和6年4月、昨年に引き続き、串間市生涯学習課から小学生を対象とした夏休みの学習支援（事業名「夏休みチャレンジ講座」）について、本学の学生の協力を得たいとの申し出があり、2年連続で参加することになった。

本学への参加依頼の大きな理由は、学習支援ボランティアとして、毎年地元の福島高校生を講師として募集をしているが、希望者が少なく人員の確保に苦慮している状況があり、本学への参加協力の依頼があったものである。

昨年は、本学の学生4名が小学生への学習指導のスキルアップを図るためのボランティアの一環として、この講座に参加した実績がある。この時

は、地元福島高校生のボランティア5名に加えて、本学の大学生4名が参加する形で15名の小学生を指導している。

本年度は、学習支援のための人員確保という意味に加え、大学生のスキルアップを図るだけではなく、昨年以上に地元の福島高校生や串間中学生と本学の学生との交流や大学のミニ講義を組み込み、本学の認知度を高める働きとともに、長期的視点に立って教職員の希望者を増やし、地域課題である串間市の教育現場の人員確保と教育の質の担保に貢献することを、活動の目標に取り組むことにした。

夏休みチャレンジ講座の主な目的は、「夏休み期間中を利用して、大学生のボランティアの協力のもと交流を通して、勉強だけではなく社会性を身に付け、小学生が安心して過ごしながらかつ学ぶことのできる居場所づくりを目指す。」となっているが、そこに、地元福島高校生と串間中学生へも広く学習支援のための講師参加を呼びかけることで、串間市が抱える地域課題の解決につなげることも念頭に置き取り組むことにした。

そのため、串間市生涯学習課と連携し、本学教員（河野）が福島高校と串間中学校へ直接出向き、串間市の小学生に対して、地元の中学生と高校生、それに本市出身者を含む大学生とが共に学習支援に取り組むことを通して、先輩後輩の関係の中から生まれる新たな学び合いと気付きの意義について伝え、地元の高中生と中学生の積極的な参加を呼びかけた。

その結果、実施された2日間で、小学生が延べ28人の参加に対して、南九州大学の学生11人、福島高校生13人、串間中学生29人がボランティアとして参加した。詳細は、次の通りである。

【実施内容】

- 1) 実施日 8／9（小：15）、8／16（小：13）
- 2) 参加者（学習支援ボランティア人数）
 - (1) 8月9日：大（6）、高（7）、中（12）
 - (2) 8月16日：大（5）、高（6）、中（17）

3) 活動内容（8／9、8／16ともに同じ流れ）

(1) 午前の部

- ・ 9:30 ～ 10:10（大学生から高校生へ留意点）
- ・ 10:20 ～ 11:50（小学生への学習支援）
 - ※ 45 分：Aグループ高校生へ大学ミニ講義
 - ※ 45 分：Bグループ高校生へ大学ミニ講義
- ・ 11:50 ～ 12:40（昼食：小学生と大学生）

(2) 午後の部

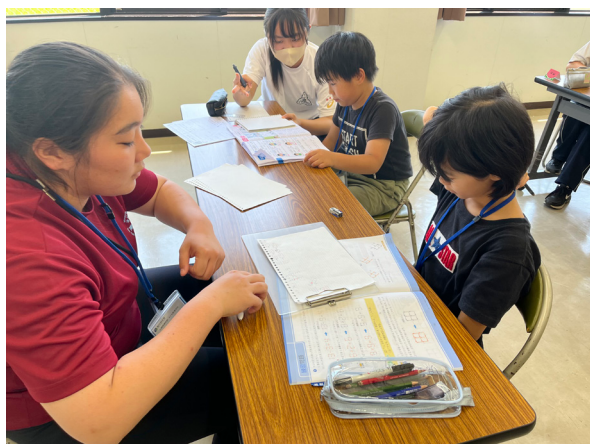
- ・ 12:30 ～ 13:10（大学生から中学生へ留意点）
- ・ 13:20 ～ 14:30（小学生への学習支援）
 - ※ 45 分：Aグループ中学生へ大学ミニ講義
 - ※ 45 分：Bグループ中学生へ大学ミニ講義

学習支援ボランティアに入る中高生の人数が多いため午前中に高校生を割り当て、午後に中学生を割りあてる計画で活動を進めていった。

2日間の午前と午後の基本的な活動の流れは、同じである。まず、活動の開始時は、簡単な自己紹介の後、中学生（高校生）の学習支援に入る生徒に対して、本学の学生が「児童に学習支援を行う時の注意点」と題して、プレゼンと質疑応答によるオリエンテーションを行った。



次に、中学生（高校生）をA Bの2グループに分け1グループが学習支援に45分入る。



その間残りの1グループは大学教員によるミニ講義「算数：数の概念について」を受講させ、残りの45分は学習支援と講義に参加生徒を入れ替える。



3 教育的効果、地域への具体的貢献

本学の学生に対して中学生や高校生が学習支援の具体的なやり方や配慮すべき点、さらには大学生活についても積極的に質問する姿が見られた。生涯学習課の担当者からは、小学生への指導はもとより大学生と中高生との交流によって、それぞれの立場において今後のキャリアを考えるうえで大変意義のあるものであったとの声が聞かれた。

その他、参加者の活用の様子や参加後の声から成果として考えられるものを挙げておく。

- 本学の学生が学習支援ボランティアとして参加したことで、ボランティアの人員確保にもつながり、小学生の学習支援が充実した。
- 「教えること」の喜びや教職への魅力を感じとってくれた生徒の声が聞かれ、教職への興味をもつきっかけになった。
- 教職課程で学ぶ本学の学生が、児童の接し方や学習支援時の留意点について中高生に、オリエンテーションを行ったことで、中高生にも、「教えること」の専門的な知識にも触れることができ、大学での学びに興味をもたせることができた。
- 中高生が大学の教員からのミニ講義を受けることで、小学校の学習内容についての基礎的な領域（数の概念）についての理解を深めることにつながり、初等教育に対する興味をもたせることができた。
- 大学進学に際して、通学1時間の範囲に学びの場として本学があることを知ってもらうことによって、中高校生の進路の選択肢を増やすこ

とができた。

- 大学生にとっては、小学生に対して直接学習指導を行うことで、指導のためのスキルを実践的に学ぶ経験になり、大学での学びへのさらなるモチベーションを高めることにつながった。
- これまで大学での学びをもとに、児童への指導においての配慮すべきことや分かりやすい指導の在り方を中高生に伝えることは、これまでの学びの振り返りを行いながら伝える作業にもなり、より実践的な知識や技能を意識する機会となった。